

# 21世紀にキリストを生きる

## 21世紀にキリストを生きる

「フクシマ」から3年：「近代日本の物語」から「神の物語」へ

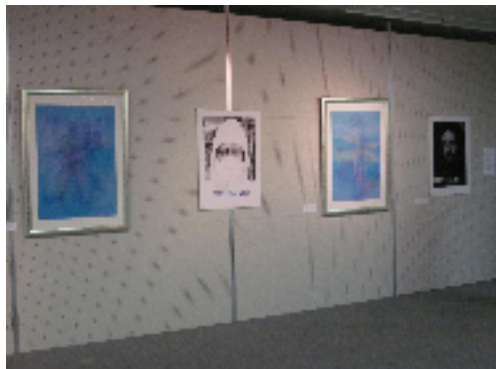
### ＜フクシマ・アート展覧会から＞

福島原発事故から3年を迎える2014年3月、「声なき者の友」の輪は「福島未来会議5 だからこの時代に生まれた ～フクシマを描く～」と題した展覧会を福島県いわき市で開催した。絵や形で表現する



賜物を託された人々が、言葉では伝えきれないフクシマからの現実を表わそうとする試みだ。11月末に福島第一聖書バプテスト教会のご協力をいただき、警戒区域の大熊町を訪問した。それから3か月、アーティストの方々は、主から示されたものを表現するために格闘してきた。

アートは、バラバラになった私たちの思いや考えを再統合する手助けをしてくれる。



(普段は緩慢な右脳に働きかけてくれるからだろう!)

この3年間、1986年のチェルノブイリ

原発事故に続く史上2番目の重大原発事故という「フクシマ」の意味を思い巡らし続けた。事故当時、原子炉が54基も日本にあったことを知らずにいた私。日本では電気が空気のようにあるのが当たり前だとなぜ、思い込めたのか考え続けた。事故後始めて、東京の夜景の煌びやかさは、日本や世界で多くの人々を踏み台にして私たちが手に入れてきた快適さの皮肉な象徴である



ことに目が開かれた。アーティストたちと白装束の防護服を着て警戒区域を歩いた時、私が生きてきた日本社会の根底を貫いていたものを思わずにいらなかった。エネルギー、そして、資源確保は日本にとって最優先されるものだったことを。それも第二次世界大戦以前から・・・。

「富国強兵」という言葉が脳裡に浮かんだ。ずっと昔に博物館入りしたような歴史で学んだ言葉だ。すると、突然「戦前・戦後」で分断されていた「近代日本」理解が、私の中で再統合された！161年前、「黒船来航」で西洋の圧倒的な技術と力を見せつけられた当時の日本人の衝撃を思う。以来、日本は西洋の力に追いつこうと、西洋近代国家体制を怒涛のように、丸ごと取り込んできた。(黒船がきたのは私の地元、横浜)

圧倒的な知識と技術を誇った西洋に並ぶために「富国強兵」は不可欠だった。そして、資源確保、西洋に倣った植民地拡大政策が採られ、すべてをかけて！戦争に突入した。1945年、敗戦国になり外国の監督下で過去半世紀の拡大政策で他国から奪った土地を取り上げられ、以前の体制に戻ることがないように様々な制度変更の指示に従った。占領下の統治が終わり、自らの手で戦後復興を始めたとき、果たして日本は戦前の理念を自ら検討・反省し、人類に貢献するものに転換したと言えるだろうか。

今回の原発事故がその答えを出している。「富国強兵」という言葉は廃れ、「天皇を頂点とするお国」のためから「国民」のためへと見かけは変更した。が、日本人には何を意味するのか曖昧な「国家」のために「富国」よりスマートに聞こえる「経済成長」、それを下支えする「エネルギー政策」を根幹に据え続けた。国民による民主主義国家のはずだが、国家の「経済成長」のために戦前と同じように何でもした！だから被爆国にもかかわらず、核の平和利用の名の下に原爆投下した本家のアメリカから原発を買い入れ、電気エネルギー大消費での経済成長に備えたのだ。

原発事故3年目のアート展覧会開催と作品を通して、私のなかで「近代日本の物語」が統合されていった。私が生きてきた日本社会の根底を貫くものを。

#### ＜韓国人スファン、米国人ジョナサンと共同で見出す「近代日本の物語」の源＞



今回の展覧会をカナダのバンクーバーの教会

と共に祈ってくれていた、大親友の韓国人スファンと夫の米国人ジョナサンが、震災

3年目を共に過ごしたいと福島に再び、やってきた。東洋と西洋を超え、そして東アジア内の違いも超える彼らとの交わりは、私にとってかけがえのない神様からのプレゼントだ。文化やものの見方の違いに出会って始めて、自分自身や所属する文化が客観的に見えてくる。聖書は繰り返し、私たちには違いがあると教えている。その違いでご自分の体を支えあい、様々な働きに参加、貢献するように勧める。イエス様はすべての人を呼び集めた体而建て上げるため、様々な手法や新しい取組みを喜ばれる。「すべてが統制されて同じ」という見かけの美は一つのやり方に過ぎない。神様が作り出されるダイナミックで有機的な「多様性」という美しさで織り成される貢献に参加させてもらう。この交わりを通して主がどこへ導こうとされるか見えてくる。韓国人スファンたちとの交わりで、主はそのような経験を私に与え続けてくださる。

今回の訪問では、日本の神学者からの洞察を深めたいと願う神学者のジョナサンに同行し、東京の聖契神学校を訪問した。そこで関野校長が昨年執筆した「自然科学から考える原発とキリスト教」という小論をいただいた。それを読み進めるうちに「黒船」以来、日本が怒涛のように模倣した西洋の「近代」科学や技術の源が見えてきた。高木仁三郎氏の論文から引用し、17世紀ヨーロッパの近代合理主義は「自然学を自然の予見とそれゆえ計画的改造を可能とする科学へと転換させ、自然を切り刻む手法を手にする・・・『機械としての自然』と結び」つけたとあった。そして「なぜ」と「いかに」を分離した科学の二元論が確立され、ニュートンやガリレオの論理と整合する新たなキリスト教自然観を形成したのだと。これはギリシャ世界や日本の自然観と異なり「神・人・自然の区分がはつきりし・・・この世界は理性支配の世界であった。」が、やがてこの自然観から「被造物」という神

中心の見方が失われ、自然は人間による研究・利用対象である「物」に転換した。「自然から搾取し、自然を商品化することに道を開いた」とあった。

ガリレオやコペルニクスの発見によって地球は宇宙の真ん中にあるのではなく、宇宙の一隅のちっぽけな存在であると「相対化」された。これは神に造られた人間として謙遜に再出発する機会だった。が、残念なことに彼らが見出した宇宙観は片隅に押しやられ、理性の神を理解したゆえの科学と派生した技術の力、生み出されたモノが、神を離れて中立に扱われ、やがて人間の力で可能だと考える「人間中心」に入れ替わってしまった。

20世紀後半に生まれた私が育った日本社会を形作る「近代日本の物語」が始まった「黒船以来」、日本が土台としたものの源は、17世紀以降ヨーロッパで確立した「二元化し、神に退場してもらった片割れのキリスト教自然観」とその制度だったのだ！この「近代日本の物語」には、人や社会、科学と経済の全体をみて生きるという視点がなかった。自然から搾取し汚染に目をつぶり、便利で快適な生活を求める一方、わずかな余暇でそれを悲しみ、自然を愛で、あるいは平伏するという、世界をバラバラにしか捉えないがゆえの矛盾に満ちたライフスタイルだったことに気づかなかった。

このライフスタイルの結果を先に経験し、少数派になった21世紀のヨーロッパ・キリスト教会は、今、聖書の言葉から何を聞いているだろう。過去に聖書から汲み取りきれなかった真理や適用できなかった真理があったことを謙遜に確認する大切な作業中だろうか？「神の物語」に目を開かれ、参加した者の重大な役割を思わされる…。

#### <日本の80年代、民への呼びかけ>

「近代日本の物語」のなかで、創造主である聖書の神と人類の贖罪を引き受けられたイエスを、私が主と信じて歩み始めた80

年代を振り返る。17世紀ヨーロッパで確立し、その後発展した「神に退場してもらった片割れのキリスト教自然観」は、接木された日本の80年代、見事な成功を収めたかに見える。世界に例のない「統制」を美として効率に秀でた社会のおかげで、敗戦後40年も経たないうちに「黒船以来」願って止まなかった世界有数の経済国に到達したのだ。そして「バブル景気」の絶頂がやってくる。

このバブル絶頂になる1987年、私が信じた神は、私の心に渴きを起こされた。私の人生をどのように用いたらよいか求めさせられたのだ。与えられた答えは・・・

「世界の最も顧みられない人々に仕えよ。」成功の絶頂に見えた「日本近代の物語」から離脱したが、それが私にとって、世界と宇宙を統治される「神の物語」への主体的参加の始まりだった。日本のバブル絶頂の恩恵を受けるより、世界の片隅で主に用いてもらえることに感謝した。

バブルは長く続かなかった。数年でバブルは崩壊。日本人として、80年代を振り返ると、私たちはあのとき再び、鎖国時代の「井の中の蛙」になっていたのではないかと思う。世界からかき集めた富を世界の貧しい人々と分かち合おうと考えただろうか。私たちは自分を肥やすことに奔走したが、他の民族の痛みを共有する「世界観」を持ち合わせていなかった。私たちが選択的にヨーロッパから接木した「近代日本の物語」には日本以外の世界をみる眼、つまり、他の民族も日本人と同じように貴い存在として造られ、イエス様によって同じように贖われたという視点が欠けていた。だから「他の民族とどのような世界を築いていくのか」という考えに到達できなかった…。

バブル崩壊直前の1990年に、当時の最貧国の一つバングラデシュへの道が私に開かれたのは、世界のあらゆる民族を慈しみ、統治して導かれる壮大な「神の物語」の著

者である神ご自身が導かれたからだと納得する。80年代、日本が困窮する世界の人々に目を向けて「全体をみる視点での世界への貢献」という理念を国家の土台にしていたら、あの景気の行方は違うものになっていたかもしれない。崩壊で終わるのでなく。

2011年の「フクシマ」の衝撃は、実は神様が日本に手を差し延べ続けている証しなのかもしれない。80年代に私たちが見逃した「近代日本の物語」を「神の物語」に転換するように、主の心からの呼びかけなのだ。

## フクシマ以後、「21世紀にキリストを生きる」

＜バラバラになった世界が「神の物語」に再統合されるために＞

2010年、ジョナサンが執筆した「断片化した世界で真実に生きる」という著書がある。米国人神学者として彼が格闘し続けるテーマだ。「断片化」つまり「バラバラになった」という言葉は「ひとつに統合されたもの」があったことを意味する。それは、人、社会、自然、科学、そして世界が神を基として調和する「神の国」だ。残念ながら、世界史は宇宙全体の理解がバラバラにされる「断片化」の歴史のようだ。21世紀の今、私たちの社会がバラバラの究極にあることを感じる。その象徴の一つが、人と技術をつなぐ意味を失ったゆえの原発事故かもしれない。

近代日本の進展に影響を与えてきた「神に退場してもらった片割れのキリスト教自然観」を思い巡らす時、イエス様に従うように召された私たちに重大な使命が託されていることに気づかされる。「著者である神がなされるようにすべてを再統合する見方」を回復し、生きることだ。壮大な宇宙からみれば、地球も人間も取るに足りない。が、神からみればかけがえがない。その神中心のキリスト教宇宙観に再統合していくことを。世界のすべての民族と自然を創造

主が造られ、イエス様によって贖われた。その管理責任を与えられている人間観や自然観に再統合していくことを。

何よりも「神の物語」に再統合されていく要の場に、主を告白する人々が導かれていくことを。それは「最も小さい者」がいるところだ。そこにイエス様がおられ、働いておられるのだから。私たちの魂が渴くとき、主は今日も背後から語られる。「これが行くべき道だ」と。すべてを一つにつなぐ「神の物語」に戻るように、バラバラになった世界に私たちを遣わされるのだから。  
\*\*\*\*\*

＜お祈りください＞

- 「フクシマ」からの学びを「声なき者の友」の輪の働きが反映できますように
- 新しいパートナーの働きが始まったバングラデシュ訪問のため（5月末）

どれほど暗闇が深くても希望はある。苦難のとき、そのことを思い出させてくださる復活の主イエス様を崇めるイースターが近づいてきました。主のお働きをご一緒する皆さまのうえに、主の希望が輝きますように。心からの感謝をこめつつ。

柳沢 美登里

2014年3月28日

「声なき者の友の輪・Friends with the voiceless International (FVI)」の働きのために、お祈りとご支援をよろしくお願いいたします。活動報告は随時、ホームページ <http://www.karashi.net> でご覧いただけます。

郵便振替：名称 FVI 口座番号 00180-0-300201

柳沢へのご支援は「柳沢支援」と明記ください。領収書は振込票で代わりとさせていただきます。ご了承ください。主の働きを共にさせていただく恵みを感謝して。